

## 日常着の色・柄嗜好への影響要因

著者	岡村 好美, 長山 芳子, 土屋 貴代, 大泉 佳広, 湯地 敏史, 清田 祐一
雑誌名	宮崎大学教育文化学部紀要. 芸術・保健体育・家政・技術
巻	28
ページ	33-40
発行年	2013-03-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/4516">http://hdl.handle.net/10458/4516</a>

## 日常着の色・柄嗜好への影響要因

岡村好美\*、長山芳子\*\*、土屋貴代\*\*\*、大泉佳広\*、湯地敏史\*、清田祐一\*

### Affecting factor on preferences of daily clothes' color and pattern

Yoshimi OKAMURA\*, Yoshiko NAGAYAMA\*\*, Takayo TUCHIYA\*\*\*  
Yoshihiro OIZUMI\*, Toshifumi YUJI\* and Yuichi KIYOTA\*

#### Summary

The color is one of the various preferences when choosing a thing, and is often used for marketing tactics as "Fashion Color". The selector's preferences influenced at clothes in particular, and a lot of studies and reports are admitted.

This research considered a preference factor on a multicolored T-shirt by using original questionnaire. Target were Miyazaki, Fukuoka's elementary school children and the university students. A questionnaire was made using 2 kinds of patterns different of the focus numbers which changed the color area, the hue and a ground color.

As a result, it was showed that the clearness of the pattern, the number of the focus and a color taste were affected on a preference on a T-shirt. Moreover, it was thought that the affecting factor on this research which consists of "area", "age" and "gender" influence on a female child was bigger.

**Keywords** ; daily clothes' pattern : 日常着の図柄、color area : 色面積、ground color : 地色、preferences of color : 色の嗜好、Affecting factor : 影響要因

#### 1. 緒言

日常生活で物を選択する場合には色彩が重視されることが多く、嗜好される色は「快」概念もしくは「自己」概念と優位に連合することが報告されている<sup>1)</sup>。また、嗜好色には季節が関係することや<sup>2)</sup>、具体的な形態を伴った場合に変化することも示されており<sup>3)</sup>、家電製品・インテリア用品・乗用車や化粧品・バッグ・洋服の色彩について嗜好色との相関を調べた結果では、トレーニングウェアが好きな色との相関が最も高い商品であると報告されている<sup>4)</sup>。このように服装と色彩の関係は深く、「流行」として販売戦略に使われることも多い。服装色に限定して

---

\*宮崎大学、\*\*福岡教育大学、\*\*\*潮見小学校

色彩嗜好を議論した報告は多く、服装色の嗜好はパーソナルカラーとの相関が高いことや<sup>5)</sup>、パーソナルカラーは衣服購入に少なからず影響を与えていること<sup>6)</sup>、大学生の嗜好色は男女ともに無彩色が認められ<sup>7)8)</sup>、女子学生ではピンクが加わることや<sup>7)9)</sup>、服装色での性差はトーンに認められることが報告されている<sup>7)10)</sup>。また、服装の色彩から着装者の意識が推察でき<sup>11)</sup>、服装色の選択要因として「価値観」・「審美性」、「個性的」・「自己主張」が考えられるとしている<sup>8)12)</sup>。さらに、単色に対してだけでなく、複数色に対する嗜好性も調査され、2色配色の場合には無彩色-有彩色の配色を選ぶ割合が高く<sup>11)13)</sup>、特定の色彩を嗜好する型のスタイルは色ステレオタイプが強い場合に認められることが報告されている<sup>14)</sup>。また、嗜好と年齢の関係について清水<sup>15)</sup>は、3歳から10歳までの子どもの色彩嗜好を調査した結果、年齢が高い方が嗜好する色彩の数が減り、これは嗜好が確立してくるためと報告している。このように色彩嗜好と服装色の関係解明の報告は多方面にわたって多数認められるが、1枚の衣服という限られた面積における、色面積や配色の嗜好傾向を論じたものはあまり見られない。

我々はこれまでに、日常着のTシャツにパンツのスタイルを基本として色彩調査を実施し、個人差は上衣の色彩に現れやすいことや上衣の色彩には有彩色が好まれることを確認している<sup>11)</sup>。そこで本研究は、複数の色彩を取り入れたTシャツの嗜好性について、福岡と宮崎の小学6年生と大学生を対象としたアンケート調査を実施し、色面積や柄の焦点数との関係から服装色の嗜好性の影響要因について検討した。

## 2. 方法

### 2.1 対象

宮崎県と福岡県内の小学生と大学生576名（小学生：宮崎県：115名：男子47名・女子68名、福岡県：179名：男子89名・女子90名、大学生：宮崎県：166名：男子78名・女子88名、福岡県：116名：男子59名・女子57名、回収率：82.29%、有効回答率：95.88%）を対象として、2010年6月から11月において、調査を実施した。なお、小学6年生と大学生を対象としたのは、小学校6年生くらいで色彩嗜好が確立されており<sup>15)</sup>、大学生は比較的制約が少なく自由な服装を選択できると考えられるためである。また、地域の影響を検討するために、九州地区で人口状況や地理的条件が異なる福岡と宮崎を対象地域とした<sup>16)</sup>。

### 2.2 調査方法

調査は、日常着としてTシャツを仮定し、デザインの色面積の大きさおよび地色との関係における嗜好傾向、焦点の数との関係および、全デザインを対象とした嗜好と嗜好色について、調査票を用いて実施した。作成した調査票を図1に示す。色面積の比較には、焦点が複数認められる絵画（マティスの「大きな赤い室内」）と、焦点が明瞭な絵画（フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」）を図柄として用いた。フォトショップを用いて、「大きな赤い室内」の赤系の色彩の最も強い色を青・黄・緑のそれぞれ最大値に合わせて色相を変え、縦を20分割・横を24分割して構図を不明瞭にするとともにシャツへの挿入数を変化させて、色面積による嗜好傾向を調べた。また、Tシャツの地色を白地・黒地の2種類として、図を分割せずに構図が明瞭な状態で胸部分に配置した場合の嗜好性から、背景色との関係における嗜好傾向を調べた。「真珠の耳飾りの少女」については色相変化を行わず、色面積の影響と地色との配色傾向を調べた。これらの結果から、着衣のデザインにおける色面積や地色との関係、デザインの焦点数の影響



図1 アンケートシート

を検討した。なお、調査票の4色について分光色差計（日本電色工業、NF777）を用いて測定した結果、各色のL\*、a\*、b\*はそれぞれ、赤：41.65, 58.75, 20.79、青：36.56, 5.98, -40.19、黄：72.99, 6.45, 77.79、緑：41.65, -46.15, 26.7で、PCCS表示<sup>17)</sup>では、赤：2R 4/8、青：18B 3.5/8、黄：8Y 7.18/8、緑：12G 4/8、トーン<sup>18)</sup>は、ストロングに該当すると考えられた。

調査の結果は、チェック有りを1点、チェック無しを0点として数値化し、単純集計の後、平均値の差の検定および因子分析によって年齢と性別と地域の観点から、被服選択における色彩の影響要因について検討した。また、好きな色について求めた回答は、色彩名数および純色・中間色の割合から、被服配色との関係について同様の観点から検討した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 Tシャツの嗜好傾向

2県の児童と学生のTシャツの図柄と配色について、二択式で得た嗜好傾向を図2に示す。焦点の数が多くて図が明瞭でない全体配色のTシャツでは、全ての回答者に小さい色面積による配色を好む傾向が認められた。しかし、赤系統に対しては回答者間の差が認められ、赤系統の小さい色面積の配色は福岡の女子児童以外の児童と福岡県の大学生において強い嗜好が認められた。赤系統に対して色面積への意識が低いと思われた宮崎の男子学生は、黄系統・緑系統についても同様の傾向を示した。全体的に青系統に対しては、他の色彩より色面積意識は統一されており、また、黄系統の小さい色面積配色は女子大生が嗜好する傾向であることが認められた。これまでの色面積の効果は目立ちとの関係から検討されることが多く、単色の場合には赤系統の色が有意に目立つことが報告されている<sup>19)20)</sup>。本調査表にはデザインの中に低明度の色彩が配されており、各系統の色彩の中でこの部分が焦点の役割を果たすと考えられる。従って色面積が小さくなることはすなわち焦点が多くなり、注目する意識が分散されることになると考えられる。調査結果は中・低明度の赤・青・緑系統の配色だけでなく、高強度な黄系統においても小さい色面積が嗜好されたことから、本回答者は、一点への集中ではなく、意識

の分散を好む傾向であると考えられた。また、焦点が多く構図が明瞭な図柄を胸部に配した場合の地色は、赤系統と青系統で全ての回答者に黒地を好む傾向が認められたことから、2色配色の場合に嗜好される無彩色は黒が多いと考えられた。黄・緑系統の場合には宮崎の女子児童

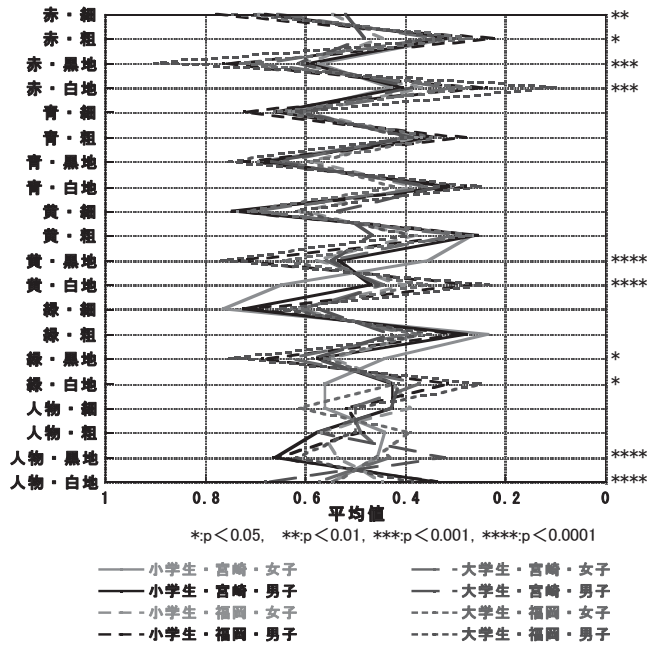


図2 宮崎県・福岡県の小学生・大学生における色・柄対における嗜好傾向

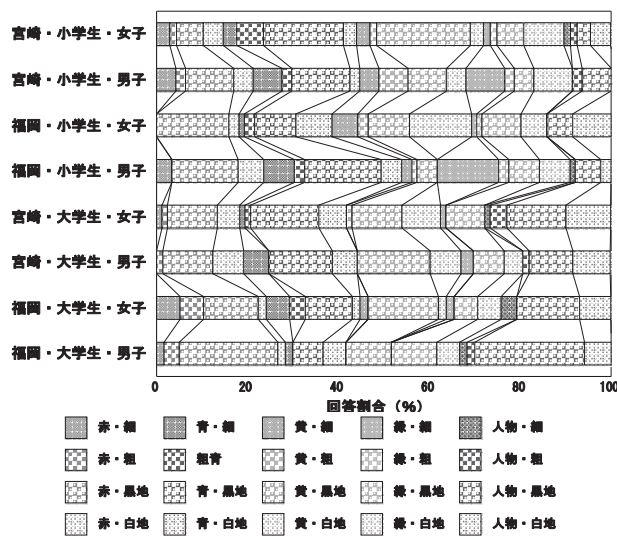


図3 好きなTシャツとして回答した割合

は白地を嗜好する傾向が認められ、また、黄系統では宮崎の男子児童も比較的白地の嗜好が他の回答者より高い傾向であることから、黄に対する意識が宮崎の児童の特徴であると共に、黄嗜好が強い宮崎の女子児童は緑に対しても黄を認めていると思われた。回答者間の有意な差は赤系統・黄系統・緑系統において認められ、赤系統-黒地のTシャツは福岡の男子児童と福岡の大学生に、黄系統-黒地のTシャツに対する嗜好は福岡の男性に認められた。また、宮崎の女子児童は白地のTシャツを嗜好することと、嗜好配色に黄・緑・白が認められることから、宮崎の女子児童が嗜好する色彩配色は色の明度が関係しており、比較的高明度の色彩が嗜好色であると推察された。

焦点が少ない図柄の場合の色面積については明瞭な傾向は認められなかったが、地色との配色関係には有意な差が認められ、多くの男性の回答者が黒地を嗜好した中で、宮崎の男子学生は白地を嗜好した。女性は福岡の女子児童だけが黒地を好み、その他の女子回答者は程度はあまり強くないが白地を好む傾向であった。これらの結果は、図柄の背景面積が比較的広い場合には、図柄全体と地色との配色ではなく、図柄の焦点となる部分とそれ以外で区別する意識が示されたと考えられる。すなわち、白地を嗜好した回答者は背景までを図柄であると判断し、また、黒地を嗜好した回答者は焦点となる部分だけを判断すると思われ、男性は焦点だけを、女性は図柄全体を認識すると思われた。またこの意味において、宮崎の女子児童と男子学生は、図柄の背景色とTシャツの地色の微妙な差を認識する色彩意識を有すると思われた。

全てのTシャツを対象として、最も嗜好するTシャツとして回答された結果を図3に示す。全体的には、青系統>赤系統>黄系統>人物系統>緑系統の順に嗜好されており、青系統・赤系統・黄系統・人物系統のTシャツでは全体配色ではなく図柄が前面に配されたTシャツを嗜好することが示された。これらのTシャツの地色は、青系統と赤系統では黒地を嗜好し、女子児童は黄系統と人物系統では白地を嗜好することが認められた。また、緑系統のTシャツに対しては、男子児童は小さい色面積の全体配色を嗜好し、次いで前面に配した白地のTシャツを嗜好することが認められた。このように、色彩系別の嗜好傾向では、あまり強い嗜好ではない黄系統・人物系統・緑系統において回答者間の差が現れやすいことが示され、この傾向は大学生より児童において認められた。因子分析の結果を表1に示す。因子数はスクリーグラフの結

表1 好きなTシャツの回答による因子分析結果

	因子1	因子2	3因子
宮崎・大学生・男子	0.8437	0.4236	0.3188
宮崎・小学生・女子	0.7460	0.0394	0.4022
宮崎・大学生・女子	0.7029	0.5771	0.1524
福岡・小学生・女子	0.5357	0.4245	0.1620
福岡・大学生・男子	0.2166	0.9509	0.2176
福岡・大学生・女子	0.5582	0.5659	0.3079
宮崎・小学生・男子	0.2893	0.1494	0.9144
福岡・小学生・男子	0.2173	0.2401	0.7721
寄与率(%)	31.73	24.98	23.59
累積寄与率(%)	31.73	56.72	80.31
Cronbach's coefficient alpha (全体:0.7863)	0.8949	0.8541	0.8701

果から決定した。因子1のグループは青・黄系・黒の色彩配色に、因子2のグループは赤・人物・黒の配色に、因子3のグループは青・赤・黒の色彩配色と緑系統に共通意識が認められた。また、大学生・児童の青系統と赤系統に対する嗜好に地域の影響が認められ、青系統・黄系統・緑系統に児童の性別の影響が、人物-地色の関係には男性・女性共に年齢の影響が認められた。また特に女子児童間では前面配置図柄の黄・緑系統-地色の関係において地域による影響が認められた。

### 3.2 嗜好色の傾向

回答者が嗜好する色彩について自由記述による回答結果を図4に示す。全体的に黒・青・赤が高評価されたことは過去に示されてきた嗜好色データと一致したが<sup>21)</sup>、個別には女子児童は青・赤に対する嗜好が弱いことが認められた。3色に次いでピンク・水色・緑・黄・紫が嗜好され、ピンク・水色・黄・紫は女性の嗜好が強く、特に水色・紫に対して女子児童が強く嗜好し、黄は女子児童と宮崎の女子学生に強い嗜好が認められた。緑の嗜好は大学生と男子児童において認められ、男子児童の嗜好の強さは大学生を上回った。因子分析の結果を表2に示す。因子1の男性と福岡の女子学生には赤・青・緑と、ピンクや水色の明清色だけでなく抹茶や茶の暗青色に対する嗜好が認められた。因子2の女子児童と宮崎の女子学生では、黄と紫と水色の明清色が認められ、表1の因子1グループに該当すると考えられた。また、黄に対する女性高評価の傾向はこれまでの報告とほぼ一致すると考えられる他に<sup>22)</sup>、明清色と暗青色においても性差が認められると思われた。

通常、小学生は生まれ育った地域の学校に通うが、大学生は希望に応じて様々な地域の大学に進むことになる。従って、地域による影響は、大学生より児童を対象とするのが妥当であると思われる。本調査でも、表1、表2より大学生より児童を対象とした場合に明瞭な性差、地域差が現れている。また、児童における本調査結果は、宮崎では比較的自然環境において認められる色彩が嗜好されることが推察された。本調査の実施地は、どちらも九州だが、南部に位置する宮崎県と北部に位置する福岡県では気候が異なり、宮崎は全国的に日照時間が長くて冬

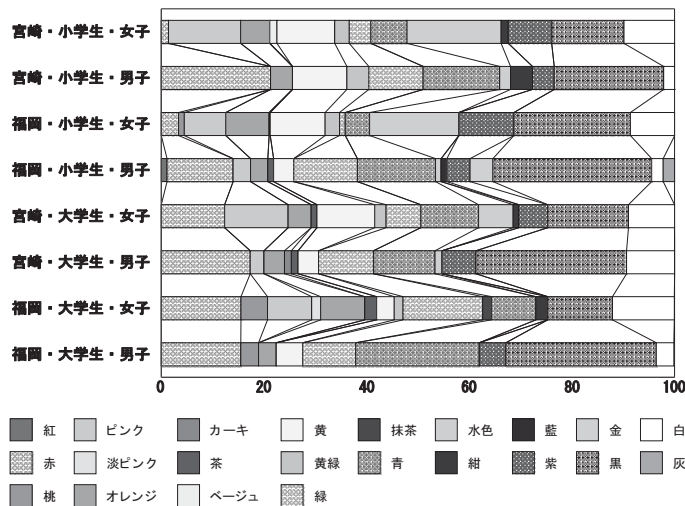


図4 色嗜好調査結果

表2 嗜好色の傾向分類

	因子1	因子2
福岡・大学生・男子	0.8192	0.5635
福岡・小学生・男子	0.7976	0.5948
宮崎・大学生・男子	0.7896	0.6086
宮崎・小学生・男子	0.7879	0.6045
福岡・大学生・女子	0.7290	0.6549
宮崎・小学生・女子	0.5641	0.8256
福岡・小学生・女子	0.6100	0.7817
宮崎・大学生・女子	0.6855	0.7232
寄与率(%)	53.04	45.65
累積寄与率(%)	53.04	98.69
Cronbach's coefficient alpha (全体:0.9424)	0.9602	0.9250

季気温は比較的高いが、降水量が多くて夏季気温はあまり高温にならない環境である。宮崎の児童が好む色彩は緑や水色など自然環境と関係が深い色彩であり、さらに女子児童では女性共通意識も関係した結果であると考えられた。

以上のことから、日常着の色・柄嗜好への影響要因はこれまでの研究結果と同様に「性別」・「年齢」・「地域」が影響しており<sup>23)</sup>、特に「地域」の影響は大きいと考えられた。

#### 4. 結論

色彩に関するこだわりは被服に対して強く、「流行」として販売戦略に使われることも多い。本研究は、焦点の数が異なる2つの図柄を用いて、色面積・色相・地色を変化させた独自の調査票を作成し、宮崎と福岡の男女の小学生と大学を対象とした調査を実施して、Tシャツの図柄と配色の嗜好における影響要因を検討した。その結果、

- ① 全体的に、図柄が明瞭ではなく、焦点となる色彩が含まれた配色のTシャツでは小さい色面積が嗜好されたことから、配色のみの場合には意識の分散が好まれると思われた。また図柄が明瞭な場合には、男性は焦点となる部分を重視する傾向が認められた。
- ② 宮崎の児童は、他の回答者ではあまり嗜好されなかった比較的高明度の色彩配色を選択し、また、低明度の色彩の僅かな差も認識できると推察されたことから、本調査の影響要因となり得る地域・年齢の影響は、宮崎の児童の色彩嗜好傾向に反映されている可能性が高いと考えられた。
- ③ 黄と緑に対する嗜好および、明清色と暗清色の嗜好に性差が関係すると考えられ、「性別」・「年齢」・「地域」による影響は、宮崎の女子児童の嗜好傾向に良く反映されていると考えられた。

以上のように、複数の色彩から成るTシャツに対する嗜好には、図柄の明瞭さと焦点の数および個人の色彩嗜好が関係し、個人の色彩嗜好への影響要因である「性別」・「年齢」・「地域」は女子児童において顕著であると考えられた。



## 引用文献

- 1) 中村信次、野寺綾：色に対する潜在的態度－潜在的連合テスト(IAT)を用いた色嗜好分析の試み－、日本色彩学会誌、35、193-202 (2011)
- 2) 陸正：パッケージデザインの基礎研究、日本行動計量学会大会発表論文抄録集、19、218-219 (1991)
- 3) 三浦久美子、齋藤美穂：＜身につける色＞と＜周辺の色＞の嗜好比較、日本色彩学会誌、28、163-175 (2004)
- 4) 楳究、赤松摩耶：物品の色の好み、日本色彩学会誌、33、239-250 (2009)
- 5) 今井弥生、高野美栄、井澤尚子：色彩嗜好とパーソナルカラー－衣服色彩との関係－、東京家政学院大学紀要、37、19-25 (1997)
- 6) 堤弘子、鈴木頼子、小木ゆみ子他3名：衣服購入に及ぼすパーソナルカラー診断の影響－診断前後の比較調査－、日本色彩学会誌、25、90-91 (2001)
- 7) 松田博子、名取和幸、仲谷洋平：大学生の嗜好色、日本色彩学会誌、27、100-101 (2003)
- 8) 雙田珠己、村上精一：大学生における衣服の色彩嗜好と選択理由の関係性、日本繊維製品消費科学学会誌、49、881-888 (2008)
- 9) 河本直樹：女子学生における衣服嗜好色の特徴、日本繊維製品消費科学学会誌、48、716-724 (2007)
- 10) 齊藤真理子、中川早苗、片山陽次郎：女子大生の二色配色嗜好と衣服との関係について、日本色彩学会誌、9、12-19 (1985)
- 11) 岡村好美、大泉佳広、湯地敏史、土屋貴代：市販教材による色彩感性の評価と色彩教育の検討、宮崎大学教育文化学部教育実践センター紀要、18、201-209 (2010)
- 12) 村山和弘、油屋直子：学生の衣服の色彩嗜好と色彩感情に関する分析、尚絅学院大学紀要、55、157-164 (2008)
- 13) 伊藤久美子：ファッション雑誌掲載服装にみる2色配色の感情評価、日本繊維製品消費科学学会誌、48、732-741 (2007)
- 14) 羽成隆司、高橋晋也：複数色に対する色嗜好スタイルと個人の色認知特性、日本色彩学会誌、33、319-326 (2009)
- 15) 清水隆子：子どもの色彩嗜好の発達と母親の色彩選択意識～性差を中心に～、日本教育心理学会総会発表論文集、42、532 (2000)
- 16) 国立天文台編：平成24年 理科年表、丸善出版、183、195、221、225、632、988-989、(2011)
- 17) 日本規格協会：色の表示方法、JISハンドブック61 色彩、日本規格協会、269-336 (2005)
- 18) 大井良雄、川崎秀昭：色彩、日本色研事業、東京、18-19 (2009)
- 19) 芦沢昌子、池田光男：目立ちの面積効果、日本色彩学会誌、18、200-204 (1994)
- 20) 須長正治、山下行由己男：情景カラー画像における色の目立ちの要因、日本色彩学会誌、27、285-297 (2003)
- 21) 日本色彩学会：新編 色彩科学ハンドブック【第2版】、東京大学出版会、670-670 (1998)
- 22) 高橋晋也、羽成隆司：色嗜好における認知要因、日本色彩学会誌、29、14-23 (2005)
- 23) 齋藤美穂、富田正利、向後千春：日本の四都市における色彩嗜好(1)－因子分析的研究－、日本色彩学会誌、15、1-12 (1991)